



モルガン・スタンレー 2003年度第1四半期に9億500万ドルの純利益を計上 株主資本利益率は16%

[ニューヨーク、2003年3月20日]モルガン・スタンレー(NYSE:MWD、以下、同社)は本日、2003年度第1四半期(2002年12月1日 - 2003年2月28日)の純利益が9億500万ドルと、2002年度第1四半期から7%、2002年度第4四半期から24%増加したと発表した。希薄化調整後EPS(一株当たり利益)は0.82ドルと、前年同期の0.76ドル、前期の0.67ドルから増加した。

第1四半期の純収入(総収入から金利費用と貸倒引当金を差し引いた金額)は、前年同期比4%増、前期比29%増の55億ドルとなった。期中の株主資本利益率(普通株式)は年率換算で16%となった。

モルガン・スタンレー会長兼CEO フィリップ・J・パーセルと社長ロバート・G・スコットは共同声明を発表し、次のように述べた。「当社は、16%の株主資本利益率を含め、今期の業績に大変満足している。これは世界経済の減速、消費者心理の冷え込み、イラク情勢の緊迫化による市場低迷という極めて厳しい環境の中で達成されたものだ。債券市場は例外的に好調で、当社は債券業務で過去最高益を計上し、ディスカバーカードも引き続き堅調であった。さらに、顧客重視の姿勢を強化した結果、複数の主力事業で市場シェアが向上した。」

法人・機関投資家向け証券業務

法人・機関投資家向け証券業務部門の純利益は6億1,800万ドルと、前年同期比17%増加した。債券業務が過去最高の収入を計上し、厳しい市場環境によるM&Aアドバイザリー業務および株式引受業務の減収を打ち消した。

- 債券のセールス&トレーディング業務の純収入は前年同期比48%増加し、約17億ドルとなった。コモディティ、クレジット商品、金利、為替グループなど、幅広い業務分野において業績が好調であったため増収となった。主要エネルギー市場の価格とボラティリティの上昇がコモディティ収入を押し上げ、顧客の取扱高増加とトレーディング環境の好転がクレジットおよび金利商品の増収につながった。
- 株式のセールス&トレーディング業務の純収入は、前年同期比5%増の9億7,700万ドルとなった。これは主に市場でのボラティリティの上昇によるものであるが、一部は顧客の取扱高および手数料の減少により相殺された。

- ・ アドバイザリー業務の収入は、グローバルベースの M&A 案件の減少により、前年同期比 43%減の 1 億 6,600 万ドルとなった。業界全体のグローバル M&A 案件(取引完了ベース)の取扱高は前年同期比 22%減少した。¹
- ・ 引受業務の収入は、前年同期比 8%増の 3 億 3,700 万ドルとなった。旺盛な債券の新規発行に牽引され、債券引受業務の収入は順調に増加したが、業界全体で株式引受業務が 60%減となるなか、当社の引受業務の収入も減少したことで一部相殺された。1
- ・ 同社は、公表ベースのグローバル M&A 案件取扱高において第 2 位(シェア 21%)、世界の株式および株式関連証券の引受業務では第 2 位(13%)、米国投資適格債の引受業務では第 2 位(11%)であった。²

1. 出典：トムソン・ファイナンシャル・セキュリティーズ・データ：2001 年 12 月 1 日 2002 年 2 月 28 日、2002 年 12 月 1 日 2003 年 2 月 28 日
2. 出典：トムソン・ファイナンシャル・セキュリティーズ・データ：2003 年 1 月 1 日 2 月 28 日

個人投資家向け証券業務

個人投資家向け証券業務部門は、純収入の減少を非金利費用の削減で一部補ったものの、前年同期の 700 万ドルの純利益から 100 万ドルの純損失となった。

- ・ 純収入は前年同期比 12%減の 9 億ドルとなった。個人投資家の株式取引が前年水準を下回り、顧客預り資産が減少した結果、資産運用手数料が減少した。
- ・ 総顧客預り資産は 4,990 億ドルと、前年同期末時点から 15%減少したが、これは S&P500 種株価指数が 24%、米店頭株式市場(ナスダック)総合指数が 23%下落したことが一因である。手数料ベース口座の顧客預り資産は前年同期比 7%減の 1,060 億ドルとなったが、総顧客預り資産に占める比率は前年同期の 19%から 21%に上昇した。
- ・ 第 1 四半期末時点のファイナンシャル・アドバイザーの総数(グローバルベース)は 12,056 人と、前期比 490 人、前年同期比 2,059 人減少した。

資産運用業務

資産運用業務の純利益は前年同期比 26%減の 1 億 600 万ドルとなった。減益は、平均預り運用資産の減少、株式商品が資産に占める比率が引き続き低下したことが原因である。

- ・ 預り運用資産は主に時価総額の減少により前年同期比 520 億ドル(12%)減の 4,000 億ドルとなった。
- ・ 個人投資家からの預り資産は前期比 140 億ドル、前年同期比 380 億ドル減少して 2,420 億ドルとなった。機関投資家からの預り資産は前期比 60 億ドル、前年同期比 140 億ドル減少して 1,580 億ドルとなった。
- ・ 同社は、モーニングスターの上位 2 ランクのいずれかに格付けされている米国内ファンドの本数が、総合的なサービスを提供している証券会社の中で 45 本と最も多い。³ また、過去 3 年間にわたって、リップラー・ランキングの上位半分に占める同社ファンド資産の比率は前年同期の 71%から 70%になった。⁴

3. 総合的なサービスを提供している証券会社は 2003 年 2 月 28 日時点でメリルリンチ、シティグループ、ブルデンシャルである。
4. 2003 年 2 月 28 日時点

クレジット・サービス業務

第1四半期のクレジット・サービス業務の純利益は前年同期比9%増の1億8,200万ドルと好調だった。加盟店およびカード加入者の手数料収入、純金利収入、その他収入の増加などの好材料が、非金利費用の増加で一部相殺された。貸倒れ償却と延滞債権比率は前年同期実績を下回った。

- ・ 第1四半期末のマネージド・クレジットカード・ローン残高は前年同期比5%増加して過去最高の518億ドルとなった。しかし、金融費用イールドの低下が資金調達コストの減少を上回ったため、金利スプレッドは同25ベース・ポイント縮小した。
- ・ 取扱高の増加で加盟店の割引収入が増えた結果、加盟店およびカード加入者の手数料収入は4%増の5億4,700万ドルとなった。売上高と残高振替が増加した結果、取扱高は前年同期比8%増加して過去最高の261億ドルとなった。
- ・ クレジットカードの貸倒れ償却率は6.17%と、前年同期比23ベース・ポイント低下した。米国経済が減速する中、引き続きクレジットの質を向上させる戦略が功を奏し、契約損失率が改善した。30日以上の延滞債権比率は前年同期比42ベース・ポイント低下して6.33%、90日以上の延滞債権比率は同17ベース・ポイント低下して2.95%となった。
- ・ 非金利費用は6億800万ドルと、前年同期比7%増加したが、これはマーケティング・広告費および人件費の増加が原因である。

モルガン・スタンレーが2002年度末以降に実施した自社株買いは、2003年2月28日時点で普通株式約400万株に達した。同社取締役会は四半期ベースで普通株一株当たり0.23ドルの配当を行うと発表した。配当金は2003年4月11日時点の普通株主に対し、2003年4月30日付で支払われる。

2003年2月28日時点の総資本は724億ドル(普通株式および強制償還の対象となる優先株式245億ドルを含む)、発行済株式数11億株に基づく普通株式一株当たり簿価は20.62ドルである。

モルガン・スタンレーはグローバルな総合金融サービス企業であり、証券、資産運用、クレジット・サービス業務において、市場のリーダー的存在である。現在、世界26カ国に600を超えるオフィスを擁する同社は、人、アイデア、資本をつなぐグローバルネットワークを最大限に活かし、世界中の顧客に質の高い金融商品およびサービスを提供している。

本プレス・リリースは同社ウェブサイト(www.morganstanley.com)上でも公開している。

###

このプレス・リリースには予想的見解が含まれている可能性がある。予想的見解は、経営者の信念と期待を反映したものであり、実際の結果が経営者の予想と異なるリスクおよび不確実性が存在する。実際の結果に重要な影響を与え得る潜在的なリスクおよび不確実性に関しては、フォーム10-Kに基づく2002年度同社年次報告書の「経営者による財務状況と業績の説明ならびに分析」セクション内における「業績に影響を及ぼした各種要因について」の項および同報告書 Part 1、Item 1 内に記載されている「市場の競争および各種規制」の項を参照されたい。